

# 町内の二天才

坂口安吾

青空文庫



## 魚屋と床屋のケンカのこと

その日は魚屋の定休日であった。金サンはうんと朝寝して、隣の床屋へ現れた。

「相変らず、はやらねえな」

お客は一人しかいなかった。源サンはカミソリをとぎながら目玉をむいて、

「何しにきた」

「カミソリが錆びちやア気の毒だと思つてな。ハサミの使い方を忘れまして、なんてえことになる町内の恥だ。なア。毎月の例

によつて、本日は定休日だから、オレの頭を持ってきてやった」

「オレはヘタだよ」

「承知の上だ」

「料金が高いぜ」

「承知の上だよ。人助けのためだ」

「ちよいとばかし血がでるぜ」

「そいつはよくねえ。オレなんざア、ここ三十年、魚のウロコを剃るのにこれツぱかしも魚の肌<sup>あはだ</sup>に傷をつけたことがなかったな。

カミソリなんてえものは魚屋の庖丁にくらべれば元々器用に扱うようにできてるものだ。オツ。姐チャン。お前の方が手ざわりも柔かいし、カミソリの当りも柔かくツていいや。たのむぜ」

そこで若い娘の弟子が仕事にかかろうとすると、源サンが目の色を変えて、とめた。

「よせ！ やツちやいけねえ」

「旦那がやりますか」

「やるもんかい。ヤイ、唐変木。そのデコボコ頭はウチのカミソりに合わねえから、よそへ行つてくれ」

「オツ。乙なことを云うじゃないか。源次にしては上出来だ」

「テメエの面ア見るとヒゲの代りに鼻をそいでやりたくなツちまわア。鼻は大事だ。足もとの明るいうちに消えちまえ。今日限り隣のツキアイも断つから、そう思え」

「そいつは、よくねえ。残り物の腐った魚の始末のつけ場がなく

ならア」

「なア。よく、きけ。キサマの口の悪いのはかねて承知だが、云つていいことと、悪いこととあるぞ。ウチの正坊しょうぼうの将棋がモノにならねえと云つたな」

「オウ、云つたとも。云つたが、どうした」

それまで落ちつき払っていた金サンが、ここに至つて真ツ赤になつて力みはじめたのは、曰くインネンがあるらしい。

「お前に将棋がわかるかよ」

「わかるとも。源床げんどこの鼻たれ小僧が天才だと。笑わせるな。町

内の縁台将棋の野郎どもを負かしたぐらいが、何が天才だ」

「町内じゃないや。人口十万のこの市に将棋の会所といえは一軒

しかねえ。十万人の中の腕の立つ人が一人のこらずここに集つてきて将棋をさすのだ。縁台将棋とモノがちがうぞ。正坊はな。この会所で五本の指に折られる一人だ」

「そこが親馬鹿てえものだ。碁将棋の天才なんてえものは、紺ガスリをきて鼻をたらししているころから、広い日本で百人の一人ぐらいに腕が立たなくちやアいけないものだ。この市の人間はただの十万じ々ないか。十万人で五本の指。ハ。八千万じやア、指が足りなすぎらア。八千万、割ることのオ十万、と。エエト。ソロバンはねえかな。八千万割ることのオ十万。八なアリ。マルなアリ。またマルなアリ。また、マル、マル、マル。いけねえ。エエ

ト」

金サンは手のヒラをだして、指で字をかいて勘定した。

「八千万割ることの十万で八百じゃないか。そのまた五倍で、五八の四千人。ざまアみやがれ」

「十四の子供だい。たった十四で四千人に一人なら立派な天才というものだ。なア。お前んとこの長助はどうだ。ゆくゆくは職業野球の花形だと。笑わせるな。親馬鹿にて候とテメエの顔に書いてあらア。学業もろくにやらねえでとツぷり日の暮れるまでタマ投げの稽古をしやがって、それで、どうだ。全国大会の地区予選の県の大会のそのまた予選の市の大会に、そのまた劈頭の第一予選に乱射乱撃、コテンコテンじゃないか。町内の学校だ。寄附をだして応援にでかけて、目も当てられやしねえ。親馬鹿の目がさ



めないのがフシギだな」

「野球は一人でやるもんじゃねえや。雑魚が八人もついでりや、バツクのエラーで負けるのは仕方がねえ。長助は中学二年生だ。二年ながらも全校の主戦投手じゃないか。その上に三年生というものがありながら、長助のピッチングにかなう者が全校に一人もいねえな」

「全校たつて女もいれてただの四五百じゃないか。このせまい町内だけをチラツと見ても、ブリキ屋の倅<sup>せがれ</sup>、菓子屋の次男坊、医者の子供、フロ屋の三平、ソバ屋の米友、鉄工所のデブ、銀行の給仕、もう、指の数が足りねえや。長助なんぞの及びもつかない凄いタマを投げる奴は、くさるほどいらア」

「フロ屋の三平、三助じゃないか。ソバ屋の米友は出前持だ。鉄工所のデブは職工じゃないか。みんないい若い者だ。大人じゃないか」

「大人が、どうした。天才てえものは、鼻たれ小僧のうちから、広い日本で四千人に一人でなくちやアいけねえものだ。長助のヘロヘロダマにまさるタマを投げる者なら、人口ただの十万のこの市だけでも四千人ぐらいはズラリとガンクビが揃ってらア。八千万の日本中で何億何万何千何番目になるか、とても勘定ができやしねえ」

「へ。いまだにカケ算ワリ算も満足にできねえな。お前は小学校の時から算術ができなかつたなア。どうだ。九九は覚えてるか。」

な。碁将棋は数学のものだ。お前の子供じゃア、とてもモノになる筈がねえや」

「お前はどうかだ。鉄棒にぶら下ると、ぶら下りツぱなしだったなア。牛肉屋の牛じゃアあるまいし、それでも今日テンビン棒が一人前に担げるようになったのはお天道サマのお慈悲だなア。その倅が、クラゲの運動会じゃアあるまいし、職業野球の花形選手になれるかよ。草野球のタマ拾いがいいところだ」

「今に見てやがれ。十年の後には何のナニガシと天下にうたわれ  
る花形選手にしてみせるから」

「十年の後にはウチの正坊は天下の将棋の名人だ。オイ。野郎の背中に塩をぶちまいて追ッ払っちまえ。縁起でもねえ」

こういうワケで、両家の国交断絶と相成ったのである。

源床が魚屋の発狂を云いふらすこと

当節は日本中に豆天才がハンランしているようである。目の色を変えているのは親だけだ。そのほかの誰も天才だとは思わない。むろんそれで月謝を稼いでいる先生も。ヴァイオリンの天才。バレエの天才。歌謡曲の豆天才。どれと云って親の熱に変わりはないが、特に熱病がハデに露出しているのは野球なぞかも知れない。「今日の打撃率は三割三分三厘だ。相手のピッチャーは年をくつていやがるから、今日はこれでよしとしておこう」

なぞと、親が河原や原ツぱの子供野球の監督然とスコアをとつて、その日の出来によつては夕食にタマゴの一ツもフンパツしようというコンタンである。

「子供が野球の練習に精をだすのは将来のためだからいいけどさ。お前さんが仕事をうツちやらかして子供の野球につきあつちや困るじゃないか。おサシミの出前を届けに行つて、三時間も帰りやしない。小僧が二人もいるのに、お前さんが出前を届けるこたアないよ。明日からは出前にでちやいけないよ」

「そうはいかないよ。来年度の新チームを編成したばかりだ。次週の土曜から新チームの県大会の予選がはじまるんだよ。長助の左腕からくりだす豪球が、ここんところコントロールが乱れている

から、ミツチリ落着いた練習をさせなくちやアいけねえ」

「お前さんが長靴をはいて、自転車に片足つつかけて、オカモチをぶらさげて垣根の外から首を突きのはしているから、落着いてタマが投げられやしないツて長助がこぼしているよ。お前さんが野球の名人で長助に手ほどきしなきやアならないというなら話に分るけど、五間とタマを投げることもできないくせにさ。オカモチぶらさげて、自転車に片足つつかけて、電柱にもたれてさ。三時間も垣根の外から首を突きだしてるバカはいないよ」

「うるせえな。隣の源次をみるよ。紋付をこしらえたよ。結婚式も借着の紋付ですました野郎が、新調の紋付をきて、商売を休んで、鼻たれ小僧の手をひいて、静々と将棋大会へでかけやがった

じゃないか。それで負けて帰りやがった。ざまアみやがれ。オレが三時間ぐらい突っ立ってるのは何でもねえ」

ひと月ほど前に、床屋の正坊が新聞にでた。県の将棋大会というのがあつて、各町村から腕自慢が百人ほども集つた中に、最年少の正吉もいたのである。二回戦で敗れたが、特に敢闘賞をもらった。その記事と、対局中の写真までのつたのである。

町内から将棋の天才少年が現れたというので、ひとしきり評判がたつた。面白くないのは金サンである。

「将棋なんてえものは大人も子供も変りなくできるものだ。将棋盤を頭上に持ち上げて我慢くらべをするワケじゃアないからな。

野球は、そうはいかねえや。まず身体ができなくちやアいけねえ。

巨人軍の川上という岩のように立派な身体の手選手が、力が足りな  
い、もつと力が欲しいと嘆いてる始末じゃないか。まず第一に長  
助の背丈を延ばして、ふとらせなくちやアいけない。滋養の物を  
三度三度食べさせて、毎日欠かさず風呂へ入れて——」

「ふやかすツモリかい」

「バカヤローめ。草木も水をかければ生長が早い。根が四ツ足の  
ケダモノでも、水中にいるからクジラもカバも図体がひと廻りち  
がってらア。水てえものは、ふとるものだ。いかに商売とはいえ  
魚だけ食べさせてちやア、大選手の身体はできない。牛肉とモツ  
とタマゴを欠かさず食べさせなくちやアいけない。床屋の鼻たれ  
小僧に負けちやア、御先祖様に顔向けができない」



こういう心掛けでセツせとやるから、子供は大喜びである。うまい物を食って、存分に野球がたのしめて、学問などはできなくとも親の文句は食わないから、これぐらい結構なことではない。ところが金サンは野球というものを全然自分ではしたことがない人だから、こういう人に限って、人の講釈の耳学問や、書物雑誌などに目をさらして、一生ケンメイに理窟で野球を覚えこむ。選手が五年かかっても実地には身につけがたいことを、理窟だけなら半日で覚えられるから、本や雑誌を山と買いこんで東西の戦記や理論に目をさらした金サンの講釈のうるさいこと。

「アメリカの大投手の伝記によると、投手は第一に腰を強くしなくちやアいけない。それにはランニングが第一だと語っているな。

日に五哩マイルも駈けてるぞ。それも遊び半分に駈けてるんじゃないやなくて、わざと坂道の多い難路を選んでアゴをだすほど猛烈に力走して腰を鍛えているのだな。キサマも、それをやらなくちやアいけない。オレが自転車についてやるから、あすの朝からはじめろ」

魚屋だから、朝は早い。早朝に長助を叩き起してランニングにつれだす。自分は自転車で汗水たらして坂道をこぐ。早朝の路上にはこれに似た人々がすれちがうが、それは人間をつれて走らせてる人々じゃなくて、犬をつれてるところがちがっている。

「投手の身体をつくるには、マキ割りなぞが大変よろしいと書かれてるな。お前は身体のできるサカリだから、こいつをやらなくちやアいけない」

わざわざ丸木を買いこんで、夕方からマキ割りをやらせる。裏庭にはマキが山とつみあげられて、表は魚屋、裏はマキ屋のようである。

これを見て、よろこんだのは隣家の床屋の源サンである。客のヒゲを当りながら、

「隣の魚屋はどうとう頭へきましたよ。そう云えば、小学校の時から、どうも、おかしいな、と思うことがありましたよ」

「小学校が一しょかい」

「ええ、そうですよ。魚屋の金公といえは泣虫の弱虫で有名なものでしたよ。寝小便をたれるヘキがありましたね。奴めの亡くなった両親が、それは心配したものですよ。それやこれやで益々

泣虫になったんですな。それが、あなた、大人になったらガラリと変りやがって、一ぱし魚屋らしくタンカなぞも切るばかりじゃなく、変に威勢がよくなりやがったんですよ。やっぱり脳天から出ていたんですな。二三年前から子供の野球に熱を入れたあげく、とうとうホンモノになりましたよ。朝はくらいうちから自転車にのって、犬と同じように子供をひいて走りまわる。夜は裏の庭で子供にマキ割りをやらせてますよ。自分は横に突っ立って、腕組みをしながら、ジイーツと見てますよ。物を云わないね。真剣勝負の立会人だと思やマチガイなしでさア。雨が降っても欠かしたことがないから、裏の庭はマキの山でいっぱいでした。あのマキを何に使うつもりだろうね」

「内職じゃアないのか」

「冗談じゃアないよ。魚屋がついでにスシを商うとか、夏は氷を商うぐらいの内職はするでしょうが、マキ屋を内職にすることはないよ。マキ割りの横に腕組みをしてジイーツと立ってる姿を見てごらんさい。生きながら幽霊の執念がこもってまさア。凄いの、なんの。見てるだけでゾオーツとしますよ。にわか逆上して、マキ割りをふりかぶって、一家殺しをやらなきやアいいがね」

「フーン。穏やかじゃないね」

「ええ、も、穏やかじゃありません。ワタシヤ心配でね。ついでにこツちへ踏みこまれちや目も当てられない。猛犬をゆずりたがってるような人はいませんかなア」

床屋は噂の発祥地。申分のない地の利をしめているから、源サンの流言はたちまち町内にひろがった。おくれればせながら金サンの耳にもとどいたから、

「ウーム。このデマは源次の野郎が張本人にきまっている。よし。覚えてやがれ。今に仕返ししてやるから」

金サンは大そう腹をたてた。

易者にたのんで豆名人を探すこと

魚屋の裏に金サンの家作があつて、トビの一家が店借りをたながしている。そのまた二階を間借りしているのが天元堂という易者であ

った。天元堂は窓の下に日々カサを増していくマキの山を見るにつけて、これをなんとか安く買って一モウケしたいものだと思つた。一日魚屋を訪れて、

「旦那、裏のマキはモツタイないね。旦那のことだから、あれを売って商売なさる筈はないが、どうでしょうね。あれを安く、元値でゆずって下さいな。私に一モウケさせて下さい。恩にきますよ」

金サンは天元堂が市では一二を争う将棋指しだということを思ひだしたから、

「お前は将棋が強いんだつてね」

「それで身を持ちくずしたこともありましてね。賭け将棋に凝つ

て、もうけるよりも、損をしました」

「それじゃアよほど強かろう。どうだい。あの床屋の鼻たれは、いくらか強いか」

「子供にしちやア指しますが、私もあの年頃にはあのぐらいに指しましたよ」

「へえ、そうか。すると、子供であの鼻たれを負かす者も珍しくないな」

「そうですね。あれよりも二三年下、小学校の五六年であれを負かすのも珍しくはありませんな。東京の将棋の会所には、同年配ぐらいで二枚落してあの子を負かすのが一人や二人はいるものですよ」



「そいつは耳よりの話だな。それじゃア、こうしようじやないか。このマキを元値の二割引きで売ってやるから、東京で将棋の豆天才を探してもらいたいな。床屋の鼻たれよりも二三年下で、あの鼻たれをグウの音もでないほど打ち負かすことのできる滅法強い子供をな。しかし、なんだな。見たところは甚だ貧弱で、脳膜炎をわずらったことがあるようなナサケないガキがいいなア。この町へつれてきて、大勢の見物人の前で床屋の鼻たれと試合をさせて、ぶち負かしてやるんだから」

「それじゃア二割引きでマキを売って下さいますか。ありがたいね。モウケ仕事ですから、それでは東京へ参つて、お言葉通りの豆天才を探して参りましょう。しかし、ねえ。脳膜炎をわずらつ

たことがあるようなのが居るといいけど、こればツかりは請合えないね。ま、できるだけ貧弱そうなのを物色してつれて参りますから、マキの方は何とぞ宜しくお願い致します」

そこで天元堂は豆天才を探しに東京へでかけた。以前懇意の将棋会所を訪ねて訊いてみると、

「ウチにも少年が三人手伝つてくれているが、これはさる高段の先生から預つたものだから、私の一存で貸してあげるワケにはいかない。それに年もちよつとくつている。十二三の子供といえば、ウム、そうだ。私はまだその子供と指したことがないから棋力の程は知らないが、向島むこうしまにバタ屋の倅で、滅法将棋が強くツて柄の悪いのが一人いるそうだ。柄が悪いというのは、子供のくせ

に賭け将棋で食つてゐるそうだね。そういう奴だから、先生に世話してやろうという親切な人も、ひきとつて育ててやろうという先生もいないが、小さいガキのくせに、力は滅法強いらしいな。この会所にもそのガキにひねられて三十円五十円百円とまきあげられた人ならタクサン来ているから、きいてあげよう」

二三の人にきき合せてくれると、いろいろのことが分つた。浅草の某所に賭け将棋を商売にしているような柄の悪いのが集つてゐる賭場のような会所があつて、そのガキはそこに入りびたつていたが、今ではそこも門前払いを食わされるようになってしまつたというのである。というのは、だんだんカモがいなくなつてモウケがなくなつたから、懐中物などをチヨイ／＼失敬する。将棋

ばかりでなく万事につけて機敏で手先が器用であるから、このガキが現れるとオチ／＼油断ができないので、門前払いを食わされるようになったってしまったのだそうだ。

「それはまた大へんなガキだね」

「しかし、滅法強いそうだけ。賭け将棋の商売人をカモにしていたそうだからね」

「呆れたガキだ」

「ここできくと、わかるそうだ」

その所番地を教えてくれた。天元堂がそこへ行つてみると、そこはバタ屋集団で、団長さんは頭をかきながら、

「あのガキですかい。たしかに本籍はここだがね。どこをのたく

つてるか、誰にも分りやしないよ。ま、きいてあげるけどね。オ  
ーイ。メメズ小僧は、いねえだろうな？ エ？ いる？ おかし  
いね。なんだって、いやがるんだろう。え？ メメズ小僧ですか  
？ あいつの名ですよ。どこにもぐってやがるか分らないから、  
みんながこう呼んでるんですよ。本当の名前なんぞ有るかどうか  
分りやしないね。あそこが小僧のウチだから、のぞいてごらんな  
さい」

小僧のウチをのぞいてみると、貧相な汚い子供が、何かせつせ  
と細工物をやってる。革の指輪に先の曲った針金をつけているの  
である。甚だ性質のよからぬ道具らしい。天元堂がのぞきこんで  
ると、小僧は目をむいて、

「あっちへ行けよ」

「変った物をこしらえてるな」

「うるせえや」

「お前のところに将棋盤はあるか」

「……………」

「三十円賭けてやろうじゃないか」

「ほんとか？」

「むろんだ」

「へッへ」

小僧はにわかにはくそ笑んで、天元堂を招じ入れたのである。小僧愛用の板の盤で指してみると、たしかに強い。天元堂が角を

落して、三番棒で負かされた。彼と同格ぐらいの力があるらしい。床屋の正坊なら、小僧が二枚落しても危いぐらいだ。賭け将棋の商売人をカモにしていただけあって、生き馬の目をぬくように機敏で勝負強い。タルミがない。

そのくせ、見れば見るほど、貧相である。まさしく脳膜炎の顔である。まるでナメクジのようにダラシがなく溶けそうな顔だ。シマリがない。ジメ／＼といつもベソをかいているような哀れな様子である。

「造化の妙だなア。生き馬の目をぬくような機敏な才がどこに隠されてるか、とうてい外見では見当がつけられない。なるほど、これじゃア人々が油断する。賭け将棋の商売人がひツかかるのも

ムリがないし、彼らが懐中物をすられるのもフシギがない。生き馬の目をぬくために生れてきたような小僧だなア。一見したところ、否、ジイッとみつめても、ナメクジよりもダラシなくのびてやがるだけじゃないか。メメズ小僧とはよく云った。ドブから這い上ったような奴だ。アツ。いけねえ。懐中物は無事かな？」

と、天元堂はハツと自分の胸を押えて、目玉を白黒させなければならぬ始末であつた。

あつらえ向きのガキを発見したから、天元堂はよろこんだ。さつそく立ち帰つて、これを金サンに報告したから、金サンも有頂天になつて、よろこんだ。

「ありがてえ。はやくそのガキを一目見たいね。つれて帰つてく



ればよかつたのに」

「イエ、それがね。つれて帰れば私のウチへ泊めなくちやアならないでしょう。私やあのガキと同居するのはマツピラですよ。カツパライを働いたためにこの世に現れた虫のような薄気味わるい小僧なんですよ。旦那のウチへ泊めるなら、私やいつでもつれてきますがね」

「それはいけないよ」

「そうでしよう。ですから今度の日曜の一番で立って、つれてきます。その手筈をたててきましたから。ヒル前には戻れますから、対局は午後からということにして、もつとも、東京行きを終電事に間に合うように指し終らなくツちやアね。私やあのガキをウチ

へ泊めるぐらいなら、ホンモノのメメズと一しよにドブへねる方がマシだよ」

そこで金サンは隣の床屋へでかけた。

「オ。源的。そッぽを向いちやアいけねえや。今日は話の筋があつてきたんだ。オレの頭が狂っているか、お前の頭が狂っているか、実地にためしてみようじゃないか。オレが東京からガキを一匹つれてくるから、正坊と将棋をやらせてみようじゃないか。そのガキは正坊よりも二ツ年下だが、ガキの方が角をひくと云つてるぜ」

「二ツ下といえ、小学校の六年だな」

「そうだとも。もつとも、学校とは縁が切れている。脳膜炎をわ

ずらッて、それからこツち、学校には上つていないそうだな」

「正坊に角をひくなら初段だが、小学校の六年生に初段なんているもんかい」

「東京にはザラにいるらしいや。魚河岸の帰りにちよいと見かけたものでな。オレの町には正坊てえ天才がいて、町の大人には手にたつ相手がいなくなつて困っているが、ひとつ指しに来ないかと云つたところが、田舎の子供なら、ま、角を落して指してやろう。なんなら二枚落して指してやろうと、こういうわけだ」

「偉い先生の弟子なのか」

「そんなもんじゃないそうだな。しかし、きいてみると、こんなガキは東京では珍しくないそうだな。東京の偉い先生は、このぐら

いのガキには見向きもしないそうだけ。六年生で初段ぐらいじゃ、とてもモノにならないそう。三ツ四ツでコマを掘りはじめて、五ツ六ツでバタ／＼と大人をなで斬りにして、小学校一年の時には初段の腕にならなくちやアいけないものだそうだな。中学二年にもなつて初段に大ゴマ落してもらふようなのは、将棋の会所の便所の掃除番にも雇つてくれないそう。この日曜につれてくるが、角をひいて教えてもらつちやアどうだな」

「よーし。正坊が勝つたら、キサマ、どうする。ただカンベンして下さいだけじゃアすまないぞ」

「アア、すまないとも。その折はチンドン屋を先頭に立てて、魚屋の金太郎はキチガイでござんす、という旗を立てて、オレが市

内を三べん廻って歩かアな」

「よし。承知した。日曜につれてこい」

話がきまったから、金サンは牛肉屋の二階広間を予約して、当日華々しく対局を行う手筈をたてたのである。

### 戦おわりぬのこと

いよく対局の当日になったが、こまったことには、この日は少年野球の準々決勝があつて、ちょうど午後の試合に長助が出場するのである。おまけに相手チームには石田という県下第一と評判の高い投手がいる。

「どうも、変だな。長助の評判が立たなくって、石田なんてえのが県下少年第一の投手なぞとは腑に落ちないな。新聞社が買収されたんじゃねえのか。そんな筈はないじゃないか」

「ところが、そうじゃないらしいですよ。見た人がみんな驚いて云ってますよ」

金サンの店の小僧がこう答えた。

「え？　なんて云ってる？」

「凄いッてね」

「凄いッて云えば、長助が凄いじゃないか」

「イエ。てんで問題にならない」

「ナニ？」

「イエ。見た人がそう云うんですよ。てんで問題にならないツてね。スピードといい、カーブといい、コントロールといい、ケタがちがうツて。町内の見てきた人がみんなそう云ってますよ。明日は町内の学校はてんで齒がたたないツてね。応援に行っても仕様がないやなんて、みんなそう云ってましたよ」

「誰だ、そんなことを云ったのは。長助にヤキモチやいてる奴だろう」

「受持の先生も、そう云ってましたよ」

「あいつは長助を憎んでいるらしいな。第一、町内の奴らには、投球の微妙なところが分りやしねえ。長助の左腕からくりだすノビのある重いタマ、打者の手元でキュツとまがる。このタマの凄

さは打者でなくちやア分りやしねえよ。よーし。明日の試合を見てみやがれ」

思わぬ伏兵が現れた。こうなると、自分の俸のことだから、メズ小僧と正坊の対局よりも心配だ。町内の者も、母校の生徒も、応援に行ってもムダだから行かないと云つてるそうだから、金サンは亢奮のためにその前夜は眠ることができない。

「ベラボーめ。県下の少年選手なんぞが、長助の投球がうてるかい。高校野球の選手だつて、めつたに齒が立つ筈がねえや。この夏休みの猛練習以来、長足の進歩をしていることを知らねえな」

金サンは翌朝未明に窓の外から二階の天元堂を呼び起して、  
「マゴく〜してると一番電車に乗りおくれるじゃないか」



「まだ、早いよ。四時前ですよ」

「オレはなア。今日の午後は長助の野球の方に行かなくちやアならねえ。野球が終ると大急ぎで駆けつけるが、それまでは将棋の方に顔がだせないから、お前が代理でござんすと云つて、よろしくやつてくれ」

「それは、ま、よろしくやるのはワケはないが、旦那もせつかくはりこんだくせに、惜しいねえ。マキはたしかに二割引で売つて下さるんでしようね」

「売つてはやるが、メメズ小僧は負けやしまいな」

「負けるもんですか。マキの方さえたしかなら、旦那はどこへでも行つてらっしゃい」

一方、床屋の源サン。これは夜更かし商売だから、当日もかなりおそくまで眠った。顔を洗つて、神ダナと仏壇を拝む。いつものことで、今日だからというわけではない。

「正坊はどうした？」

「<sup>ひる</sup>午まで遊んでくると云つて、でかけましたよ」

「フン。落着いてやがるな。それでなくちやアいけねえ」

「今日は大丈夫かしら」

「大丈夫だとも。正坊の二ツ年下で、角をひいて正坊に勝てるよ  
うな大それたガキがいてたまるか。だから正坊にそう云つてや  
つたんだ。お前が勝つにきまつてるから、あせつちやいけな  
い。ただ年下の奴が角をひくんじやカツとして腹が立つ。腹を立てち

やアいけない。静かな落ち着いた気持で指しさえすりやア負ける道理がないんだとな」

「じゃア大丈夫ね」

「むろん、大丈夫だ。金太郎の野郎め。今日こそはカンベンならねえ。チンドン屋を先頭に、金太郎はキチガイでござんすという旗をたてて、市内を三べん廻らせてやる」

定刻になると、源サンはセビロを一着して、むろん弟子にヒゲを当らせ頭にはポマードをたツぷりつけて、正坊をつれて会場へのりこんだ。

金サンも当日はセビロである。むろん靴もゴム長ではない。青のサングラスをかけて、ネット裏に陣どった。いよ／＼長助のチ

ームが出場の番になったが、その入場に誰も拍手した者がない。応援団が一人も来ていないのだ。相手チームの入場にはけたたましい声援と拍手が起った。応援団ばかりじゃなしに、満場の大半が拍手を送っている。優勝候補筆頭の期待のチーム、県下のホープなのである。

「面白くねえな。しかし、今に見やがれ。吠え面かかしてやるから」

金サンは満場のバカどもに一泡ふかせてやろうと、口に美声びせいじ錠ようをふくんで時の至るを待ちかまえた。ところが、である。試

合がはじまってみると、実に意外である。意外、また意外である。石田投手の物凄さ。身長は長助と同じぐらいだが、スピードは段

がちがう。コントロールはいいし、カーブを投げてもスピードが落ちない。金サンはカーブというものは曲る代りにスピードが落ちてフワ／＼浮いてくるものだと思っていたのである。

「ウーム。凄い野郎だ。別所に負けないスピードだ」

金サンが思わず嘆声をもらしたので、近所の人々が笑いをもらった。金サンはムキになって、隣りの人に食ってかかった。

「あいつは超特別の大天才投手だよ。凄いウナリじゃないか」

「スポンジボールだからね」

「なアに別所だつて、あんなもんだよ。カーブだつて目にもとまらない速さじゃないか」

「どうかしてるな。このオジサンは。オジサンはあの学校の先生

かい？」

近所にいた子供がきいた。その連れの子供が云った。

「あのピッチャーのオヤジだろう。あんまり変テコなこと云いすぎらア」

すると、みんなが笑ったのである。しかし、まさかアベコベのオヤジとは誰も気がつかない。金サンはいささか蒼ざめた。バツタくと三回まで長助チームは全員三振であつた。長助はしきりに打たれて三回までに五点とられた。

「よく打ちやがるなア。あのピッチャーだつてうまいんだがなア。あの左腕からくりだす豪球——」

「豪球じゃないや。へろくくじゃないか」

「バカ。相手のピッチャーが豪球すぎるから、そう見えるのだ」

「ウソだい。あんなへナチヨコピー、珍らしいよ、なア。クジ運がよかったから準々決勝まで残れたんだい。別の組だったら一回戦で負けてらア。ほら、ごらんよ。石田が降りて、第二投手がでてきたよ。第二投手でもあのへナチヨコの倍も速いや」

「なるほど、速い。そろっているな。超少年級。プロ級じゃないか」

「バカ云ってらア」

長助チームは第二投手も全然うてず、五回にして十一対〇。ワールドゲームであった。金サンは茫然。夢からさめたように立ち上った。帰って行く長助チームの姿を認めて追いついてみると、

彼らは敗戦などはどこ吹く風、まるで負けたのが愉しそうである。

「全然かすりもしねえや。速えなあ」

敵に感心して、よろこんでいる。金サンは部長の先生に話しかけた。

「運がなかったですね。あんな強いのにぶつかっちゃアね」

「イエ。運がよかったですよ。ここまで来れたのがフシギですよ。一回戦で負けてるのが本当なんですな」

「そんなにみんな強いですかね」

「つまりウチが弱すぎるんでしょうな。ピッチャーがいないんです。こんなのが二年つづけて主戦投手ですからね。左ピッチャーという名ばかりで全然威力がないのですから」



部長はキタンのない意見をのべた。金サンは言葉がなかった。長助を見ると、さすがに苦笑している。金サンはようやく目がさめたのである。にわかには疲労が深かまってしまった。金サンが牛肉屋の二階へ来てみると、誰もいない。女中が掃除をしていた。

「もう、すんだのかい？」

「ええ、二時間足らずですんじやいました」

「どうだった？」

「床屋の子供が三番棒で負けたそうですよ」

「そうだろうな。天下は広大だ。天元堂はどうしたえ？」

「小僧をひきずって停車場へ行きましたよ。この町へ置いといやア物騒だとか何とかブツ／＼云いながらね」

金サンは源床の前に立った。本日休業の札がかかげられて、カーテンがおりている。金サンは露地を通つて床屋の裏口から声をかけた。源サンがねころんでるのが見えたからである。

「源的。すまねえ。そう睨んじやいけねえよ。あやまりに来たんだ。まったく、すまねえことをした。しかしだなア。お前もガツカリしたろうが、こうした方がよかつたのかも知れないぜ。ウチの長助もコテン／＼、問題にならねえや。未来の花形選手どころじゃねえや。天下は広大だてえことが、つく／＼分つたなア。早く目がさめて、まア、よかつたというものだ」

源サンも敵の来意がのみこめたので、上体を起して背のびをした。そして、云つた。

「バカな夢を見たものだ」

「まっただ」

「長助もコテン／＼か。アツハ。おかしくも、なんともねえや」

「本日休業か。損をかけたな」

「お前、いくらだった？」

「アツハ。おかしくも、なんともねえ」

金サンが店へ戻ってみると、天元堂が裏庭から自分の二階へマキを運んでいる最中であつた。ネジリ鉢巻に尻をはしよツて忙しくやっている。

「ヤ、旦那。無事、すみませう。角落ちで、見事に三番棒でさア」

「そうだったな」

「マキは運んでいいでしょうね」

「うるせえな。運んでるじゃないか」

「ですから、運んでいいでしょうね」

「早く運んじまえ……」

金サンは割れ鐘のような声で怒鳴ると、家の中へもぐりこんでしまった。

# 青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 14」筑摩書房

1999（平成11）年6月20日初版第1刷発行

底本の親本：「キング 第二九卷第一四号」

1953（昭和28）年12月1日発行

初出：「キング 第二九卷第一四号」

1953（昭和28）年12月1日発行

入力…tatsuki

校正…noriko saito

2009年4月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 町内の二天才

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>